

大会宣言 (案)

結成から3年！JR東日本輸送サービス労働組合東京地本は“すべての仲間と共に！”を合言葉に、職場活動を原点としてたたかいをつくり出してきた。そして、労働者代表者選挙のたたかいの成果や、第3回定期大会以降、新たに40名の仲間が加入したことで、輸送サービス労組運動の正しさが証明された。今定期大会では「輸送サービス労組未来ビジョン」を私たちの手でつくり上げ、組織の強化・拡大を推し進めていくことを確認した。

国鉄改革から35年が経過し「公共性の高い鉄道の復権」や「雇用不安を起こさない」理念が大きく揺らいでいる。会社は、新型コロナウイルス感染症による行動様式の変化で「変革2027」を加速させ、経営環境を理由にした過度なコストダウンにより、みどりの窓口廃止や駅の時計・トイレの撤去、ダイヤ改正における運転本数削減など、社員だけではなく利用者へ負担を強いるような顧客軽視の経営姿勢にひた走っている。そして、新たなジョブローテーション施策や乗務員登用試験の廃止、「現業機関における柔軟な働き方の実現」など、矢継ぎ早に施策が打ち出され安全軽視の経営姿勢と言わざるを得ない。乗務員職場では、運転士の速度超過や車掌の赤閉めなどミスが相次いでいる。また、見習い期間延伸や、単独乗務不適格になるといった今までに無い事態が多数起きている。そして、本人希望や家庭環境、さらには人権までもが否定され、人事権を乱用した強制的な異動により「子育てと仕事の両立が出来ない」「この会社に未来は無い」と、退職の道を選ぶ組合員・社員も増えている。施設電気職場では、待避遅延が連続発生した対策として、線路閉鎖によらない場合でも線路内に立ち入ることを可能にした“いのちを脅かす通達”がボトムアップを置き去りにして出され、過去の事故の教訓を捨て去った。職場を熟知している先輩を排除し「モノ言えぬ国鉄末期の上意下達風土」を貫徹させ、技術・技能継承である鉄道の経験工学をマニュアル化させ、現場が素人化している。

系統を問わず相次ぐ事故・事象に対し、会社の対策は「基本動作の徹底」などに留まり、深掘りが出来ず、安全の質が低下している。人間はミスをする動物であるが「なぜ起きてしまったのか」など、背後要因を掴まない限り、事故は無くならない。安全分科会を通じて“安全”“いのち”を絶対の価値基軸として本音の議論は不可欠だ。職場からの「今のJR東日本は、福知山線脱線事故前夜である！」という危機意識に共感し、共有した危機感から国土交通省へ議論を働きかけた「青木 愛」氏必勝に向けて、参議院議員選挙を全力で取り組もう！

4名の仲間が立ち上がった「脱退パワハラ訴訟」は正念場を迎える。私たちは「あったことをなかったことにはしない！」そして「ジェイアールバス関東不当労働行為事件」と「八王子駅パンフ配布処分事件」のたたかいを追い風に、すべての仲間と連帯してたたかい抜こう！

会社のチェック機能を果たし正当な評価と還元を求めることは、労働組合として当たり前である。昨年はベアゼロのみならず、JR各社で唯一定期昇給半分カット、さらに夏季手当・年末手当の支給は過去最低となり、エッセンシャルワークの労働価値を軽視している。この間、すべての組合員でつくりあげた「根拠運動」は着実に根付き「定期昇給完全実施」を実現させた。そして、夏季手当のたたかいでは決算報告書を読み解き、支払える根拠を職場から堂々と訴え、今後労使で目指すべき方向性を3点確認して妥結したことは、私たちの成果である。そのような中、突如報じられた週刊文春の記事は、会社の信頼を大きく失墜させたと同時に、社員への説明責任を果たすことなく、深澤社長の定例会見での謝罪は現場に不信感を抱かせた。わずかな報酬カットの処分でも幕引きを図ることは、この間の黒字化への努力を足蹴にするものだ。

首都直下型地震を想定した「東京都の新たな被害想定」が5月に発表された。また、昨今の局地的な豪雨や雹など、異常気象による被害が甚大化している。あらゆる自然災害に備え、線区の防災マップの検討・見直しを行い、事前防災の観点で“災害からいのちを守る鉄道”をつくり出そう！“いのち”を最優先の価値基軸に、安全で公共性の高い持続可能な鉄道を取り戻すため、輸送サービス労組を狙い撃ちにした労組対策に立ち向かおう！そして「働きがい」「生きがい」「こころの豊かさ」が実感できる健全なJR東日本をつくり出すために、全組合員でたたかおうではないか！

以上、宣言する。

2022年7月8日
JR東日本輸送サービス労働組合
東京地方本部
第4回定期大会